

# 禅僧の詠んでない歌を集めて『詩経』を作る



『絵本大和詩経』

現在の日本人には江戸初期の禅僧盤珪永琢（一六二二—一六九三）の知名度はさほど高くはないであろう。二十世紀に鈴木大拙に再評価される前に、忘れられつつあった人物であるといえよう。しかし、生前から江戸末期までは大勢の人に親しまれ、人気の高い人物であった。国文学研究資料館所蔵の『絵本大和詩経』はそれを意外な形で証明している。盤珪の特徴は何と言っても、独自の「不生禅」と言われる思想にある。つまり、生まれる以前からすべての人に仏性が備えているから、難しい公案や厳しい修行に励まなくても誰でも仏でいられる、という考えである。根源を探れば少し難解な思想ではあるが、盤珪のもう一つの特徴は庶民に分かりやすく、理解されるまで同じ事を説いたことにもある。日本語での説法の他に歌も作成した。『絵本大和詩経』の角書には「盤珪禅師さとし歌」と記されていて、序文にも盤珪が詠んだ歌の選集であると記されている。しかし、他の盤珪の歌と比べてみると疑念を抱かざるを得ない。代表的な『白引歌』にはトレードマークの「不生禅」が明確に見える。例えば、

「来るごとくに、心を持ってば、すぐにこの身が、みな仏」

ありのままの心は悟った心であるという大意で、思想色の濃い内容である。盤珪の詠んだ作品はほとんど同じである。それに比べると、『絵本大和詩経』の歌には盤珪の説法や禅宗または仏教の彩りは皆無であるといえよう。むしろ、儒教色が濃く彩っている。親孝行などを歌う作品に、孔子や孟子の引用で解釈される所が目立つ。例えば、最初の作品は次である。

「朝は起ては父母様 拝釜娘に賢し神はなし」

実は、『絵本大和詩経』は、作者の馬山樵夫が当時（明和八年、西暦一七七一年）流行っていた教訓的な歌謡を集めて、注釈をつけたものである。五経の一つである『詩経』に歴代の儒者が倫理的な解釈を付け加えたように、同じことを日本の歌を対象とするから『絵本大和詩経』と題されたものであろう。では、盤珪との関係をどう考えればよいのか。知名度を借りて、何の関係もないものに盤珪を騙るのはどうかと思うかもしれないが、そうすることで江戸時代の人々にどれだけ盤珪が大事な人物であったかということも教えてくれている。

（ダヴァン ディディエ）